

【記者からの質問】

読売新聞／当初、県立大は令和10年の開学を目指していた。1年延長したのか。
知事／基本構想での開学時期は、令和10年4月以降だった。これは、敷地も広く、造成も完了し、事務手続も不要なら考えられた。しかし、設置場所決定に伴い、改修を前提とし詳細に検討を重ね、11年4月とした。

読売新聞／学生の受け入れは、新校舎利用開始となる12年4月からか。
知事／11年4月に1年生が入学。並行して工事を進め、開学2年目に新校舎が使えるようになる。長崎県立大学の例もあるように、開学後、騒音を立てない形で工事を進めるのはよくあること。そのため、開学は11年4月にしたい。

読売新聞／改修校舎にも学ぶ施設を整備するのか。
知事／まずは開学することが大切。成長型の大学として、1年生は最大限できることを行い、2年次を楽しみにする形になるだろう。

日経新聞／1年生は、改修後の校舎で、事務局と教室が一部ある建物で勉強を始める。その横で新校舎の建設が進み、翌年は1年生と2年生が新校舎に移るということか。
知事／そのとおり。県立大学はフィールドワークを重視している。県内いろんなところを巡ってもらって、様々な新1年生にふさわしいプログラムを専門家の皆さんと共に、考案する。

日経新聞／開学時期が1年遅れることに対する協力企業からの反応や影響は？
知事／そこは丁寧に説明し、相談もしたい。もともと令和10年4月あたりでと、企業の皆さんには相談をしていた。お互いに早く開学したい思いはあるが、学生、地域、県にとっての最善を考えると、しっかり準備できる11年4月となった。

日経新聞／開学に向けて、県民の理解を得るための事前セミナーや大学のイメージを伝えるイベントの開催は予定しているのか。

知事／すばらしい質問。大学は、つまりソフト。開学までの時間、県立大学が何を指してどんな大学にするのかを具現化する。地域に開かれたセミナーなども実現させたい。

県で行っている様々な知の集積の機能も、いずれは県立大学の中に置きたい。専門家の皆さんを中心に具体化するプログラムを考えてもらっている。今日の発表内容を前提に、さらに具体化を進めていく。

日経新聞／専門家チームには、開学後も続けて大学の運営に関わる人もいる想。1年遅

れることで、ライフプランが変わるのでは？

知事／そこは相談済み。最適解を見つけようとする中で、11年4月が良いと判断した。SAGA アリーナのオープンや国スポの開催時期同様、全体のプログラムの中で総合的に考え、与えられた条件の中で最適解を探し、今回の結論に達した。

朝日新聞／総事業費と財源を教えてください。もう1点、議会の議決を取るにあたり、議会の理解をどう得ているのかを聞きたい。

知事／事業費は、移転経費も含め最大200億円を想定。できる限り、想定内で収めたい。

財源は、基本的に全てを地方債で賄う。財政に大きな影響がないよう、財政計画のローリングに含めている。一番悪い条件を想定し、財政計画を立てた。

議会との関係について。「県立大学の機能が県には必要だ」という強い思いがある。大学進学率は増えており、県の経済や今後の成長において、大学は不可欠な機能。小学校、中学校、社会や産業界とつながりのある新しい大学だからこそできるものを目指す。古い県立大学を修正するのは難しいが、新規でつくるのが最大の強み。議会にはこの点を主張している。必要な予算があれば、都度県議会に示し、議論し賛同を得たい。真摯に取り組む。

佐賀新聞／県立大学の場所が要因で1年延長した。その詳細をお聞きしたい。

知事／理想的なのは道路に接道している更地で、法的な制約もない土地。そのような土地ならば、10年4月以降と設定した。

公立大学は、入札などの手続があり、一定の時間がかかるのはやむを得ない。場所が決まり、県庁各課、様々なところと詳細調整した結果、11年4月となった。

佐賀新聞／場所の公表は7月下旬。約1か月で開学時期を見直すことになったのか。

知事／9月議会での予算化を調整していたが、10年4月開学は難しいという庁内の見解となった。そうであれば、早く発表したほうがよいだろうと、11年4月とした。

佐賀新聞／常々早く大学を開学させたいと言われていた。1年遅れることへの所感を。

知事／今でもできるだけ早くと思っている。世の中の動きとのタイムラグをなくしたいし、少しでも早く佐賀で学びたい子どもにその場を与えたい。しかし、みんながよかったと思えるものをつるという観点も大事にし、ハードとソフトを含め一番いいスケジュールが今回の発表。

毎日新聞／遅れた理由は、設計業務に当初より時間がかかったのか。それとも改修、新築工事に時間がかかるのか。

知事／これまでは場所が決まっていなくて、庁内で具体的な検討ができなかった。一

部の人だけで議論していたが、オープンに議論ができるようになり、10年4月は難しいことがわかった。

遅れたと言われるが、10年4月以降と幅があった。その幅の中で11年4月が最適だった。10年4月は、条件をクリアする場所があればというぎりぎりの期限。11年4月も、これから何が起きるかわからないが、全力で目指すという思いで発表した。

S T S / 今回、佐賀県立大学の仮称が取れたのか。正式名称を発表する考えは？

知事 / 今回の資料で仮称が取れているが、意味はない。まだ、仮称だと思っている。

特段の問題がなければ、佐賀県立大学になるのかと。設置条例や認可などの場面で、区切りが来るだろう。

S T S / カスハラ対策の予算の対象に自治体職員も対象に含まれるのか。

知事 / 原則、民間企業が対象。県庁では10月に行政用マニュアルを作るので、市町と共有したい。

S T S / 唐津線のICカード利用についてのお考えは。

知事 / 佐賀県は、ICカード利用可能エリアが32%から53%になり、九州でも6位から3位に上がった。唐津線は、私の最大の関心事でもある。唐津駅では、福岡方面への利用ができる。佐賀駅は、鳥栖方面への利用ができる。両駅共にICカードが利用できる改札があるのに、唐津線の唐津—佐賀間では使えない。唐津線は、県の大動脈。高速化、ICカード化はいずれ取り組みたい課題。

ICカード化に限れば、先に実現したいのは鹿島、太良。これはJR九州とも話をしている。

佐賀新聞 / 県立大学の500万円は、本年度支出する。そこから3年間かけて6.6億円支出するということか。

知事 / 本年度は、設計者の選定、マネジメントも含めた経費が500万円。認められたら、準備作業はするが、実際の契約は令和6、7、8年度となる。

佐賀新聞 / 開学が令和11年4月になったのは、何が見込みと違っていったのか。

知事 / 議会からの指摘もあり、一つ一つ丁寧に、その都度議会に示しながら進めてきた。場所を早めに決めないと先延ばしになると考え、7月までと期限を設けた。場所が決まると、さらに先が見えてくるものがある。

私学ならもっと早くできるが、公立大学はルールに基づき予算をつくり議会に提出、契約時も議会の承認を得てというプロセスがある。逆に、その時間をうまく生かして、ハードとソフトの連携、ソフト対策、地域密着などの議論を膨らませ、最適な形で開学

に結びつけたい。

佐賀新聞／設計業務が3年間とは、時間がかかる。そういうものか。

知事／そういうもの。

朝日新聞／有明海関係の予算は、今回ゼロか。

知事／はい、補正予算では。

朝日新聞／補正には入れていないのか。

知事／はい。

朝日新聞／政府の概算要求は事項要求になり、100億が満額出るかわからない。漁民は、不安に思っている。12月補正も含め、国の動きを待たずに県が対策する考えは？

知事／有明海再生予算は、当初予算で計上しているので、それをやっていく。

今回の100億円の基金は、開門問題に関連して和解勧告から出てきた話。そのまま基金として使えると思ったら、地方負担の話があった。事項要求になったのは、国として決着がついていないから。形がみえないと県も予算化できない。今後も注視していく。

有明海再生はみんなの思い。漁民たちは翻弄され続けてきた。彼らは、漁をしたいだけ。それらを踏まえ、大きな観点からの方策を考えていただきたい。